

矢
吹
町
史

第1卷
通史編

第一編

矢吹町の自然

概 説

矢吹町は、東径一四〇度一九分、北緯三七度一二分、東北地方の南端、福島県中通りの中南部、郡山市の南方二五キロメートル、白河市の北方一五キロメートルの地点にある。

東は阿武隈川を境にして石川郡玉川村・石川町、南東部は中島村、南西部は泉崎村、西は大信村、西北部は天栄村、そして北部は鏡石町と境を接している。東西およそ九・五キロメートル、南北八・六キロメートル、その総面積六〇・八平方キロメートルを占め、北部と南部には山林が比較的多くあり、他はほとんどが標高二八〇〜三三〇メートルの洪積世前中期の丘陵をなし、主として耕地として利用されている。

東には那須火山帯にその源を発し、段丘、氾濫原を形成する阿武隈川がゆっくりと蛇行しながら玉川村との境を北流し、泉川は矢吹が原南東部の平坦地をけずって流れ、中島村で阿武隈川に流入、西部には天栄村権太倉山に源を発する隈戸川が、羽鳥湖の水を集めて矢吹が原をうるおしながら北流し、釈迦堂川となり、須賀川地内で阿武隈川に合流太平洋に注いでいる。

日本列島が大陸から分離し、いくつかの島の集まりの姿をとったのは、第四紀と呼ばれる最近の二〇〇万年の間のできごとである。しかし、現在私達が見るような自然の姿が形成されるには幾多の変動があった。即ち、今から二、六〇〇万年前新生代新第三紀中新世と呼ばれる時代に、アジア大陸の東縁に激しく、そして長い期間にわたり、何回となく起った断裂運動によって、日本海の原始形態、オホーツク海や東支那海の原形を作っていた。

この時代には「阿武隈山地や北上山地はすでに形成されており、これらの山地生成は古生代にさかのぼる。第三紀の終り頃には奥羽脊梁山脈や越後山脈が隆起し、阿武隈川沿いは取り残され低地や盆地を作り、これらにさらに地殻変動が起り、丘陵地帯となり、矢吹が原の基盤ができたものと考えられる。新生代第四紀洪積世には北半球に氷河が発達し、火

山活動なども盛んであったが、ちゅうせきせい沖積世になり氷河が消滅し次第に暖かとなり、二〇〇万年前に出現した人類の歴史が本格的に始まることになる。

矢吹が原はその昔、宮内省のご狐場ともなり、広大な面積を有する未開懇地であったが、天栄村羽鳥地内にダムを建設し、矢吹が原を開田しようとする農林省矢吹が原開拓事業が昭和十六年着手、一時中断されたが、戦後再開、昭和三十一年通水を開始した。これにより矢吹が原は豊かで広大な耕地を有する田園の町へと大きく変容した。町の中央部にある諏訪山保健保安林は、わずか三・八ヘクタール程の広さであるが、ここにはコナラ・シデを主とする樹齢二〇〇年程の森林群落がある。コナラの目通り直径九五センチメートル、イヌシデ・アサダの大なるものは八五センチメートル、ハリギリ九〇センチメートル、その他ヤマザクラ・コブシ・ケヤキ等樹高二〇数メートルの大木が鬱蒼うっそうと生え繁り、原生林の様相を呈している。もしも開拓が進まなければ、矢吹が原はこれらの森林で覆われていたのではなからうかと推定される。ここには当地域を代表する植物のほとんどが見られるといっても過言ではないし、また、小鳥や昆虫類の絶好のすみかともなっている。矢吹町は年平均気温が一二度前後という極めて生活し易い恵まれた地域であり、地震や風水害などの影響のほとんどない緑の多いすばらしい自然を持つふるさつである。この美しいふるさとをいつまでも持ち続け受けついでいきたいものだと考える。

(佐藤 隆)

第一章 気 候

一 気 温

気温の日変化

気温は太陽の輻射ふくしゃによって得られ、時々刻々と変化する。一般に晴れた日は気温の変化が激しく、曇や雨が朝がた（日の出直前）、最高は昼過ぎ（午後二時頃）にあらわれる。最高となる時刻は年間ほぼ一定であるが、最低となる時刻は日の出時刻の年変化に一致している。

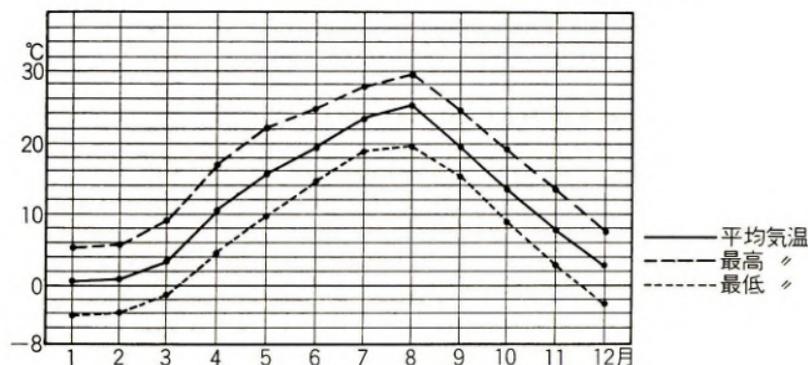
気温の年変化

一、二月はアジア大陸に発達した高気圧の影響を受け、卓越たくとくした北西の季節風により、空気は乾燥かんせうし気温は最低となる。しかし、三月に入ると太平洋の高気圧の勢力が強くなり、寒冷で乾燥した大陸の高気圧が次第に弱まり気温が上昇、六月から七月上旬にかけての梅雨が終ると、太平洋高気圧が強くと日本附近をおおい、一年中で最も暑い七、八月を迎える。

秋霖しゅうりんもおさまり、十月に入り台風の影響も受けなくなると、澄んだ青空を見せるいわゆる秋晴れとなる。十月下旬には初霜、十一月中旬頃には初雪を見るようになる。

次に寒暖の日数を見て見ると、冬日（日最低気温が0度C以下の日）は年一二〇日前後あるが、真冬日（日最高気温が0度C以下の日）は全然ないか、あっても極めてわずかである。夏日（日最高気温が二五度C以上の日）は年八〇日前後、真夏日（日最高気温が三〇度C以上の日）は、夏日のほぼ半分となっている、即ち当地域は、冬は長いが寒さの厳しい日は少なく、夏は暑いが短かいことになる。昭和五十三年のように梅雨あけが早く、真夏日が六四日もある年はきわめ

第1図 気温の年変化（昭和40年～51年までの12年間の平均）



第2表 冬日、真冬日、夏日、真夏日の日数

年	日			
	冬日	真冬日	夏日	真夏日
昭和39年	112	0	81	30
“ 44 ”	114	2	73	35
“ 49 ”	125	0	76	30

第1表 終雪、終霜、初霜、初雪の月日

年	項目	終雪	終霜	初霜	初雪
		月日	月日	月日	月日
大正 9年		3.24	4.19	10.25	12. 7
“ 10 ”		3.29	4.17	10.17	11. 9
“ 11 ”		4.14	4.16	11.12	11.16
“ 12 ”		4.10	4.13	11. 9	12. 1
“ 13 ”		3.30	5.10	10.18	11.10
“ 14 ”		4.10	5.14	10.24	12.17
“ 15 ”		4.27	5.15	10.21	11.15
昭和 2 ”		3.21	4.23	10.15	11.23
“ 3 ”		4.24	4.25	10.20	11.12
“ 4 ”		4. 3	4.23	11. 4	11.12
“ 5 ”		4.19	5. 3	10.21	12. 1
“ 6 ”		3.30	4. 7	10.20	11.17
“ 7 ”		3.29	4.12	10.26	11.27
“ 8 ”		4. 1	5. 3	10.19	11.28
“ 9 ”		3.29	4. 2	10.20	11.11
“ 10 ”		5. 1	4.19	10.24	12. 6
昭和 49 年	矢吹	4. 3	5. 7	10.25	11.13
	郡山	4. 3	5. 7	11. 3	11.12
	白河	4. 3	5. 7	10.25	11.13

第3表 最高、最低気温の月日

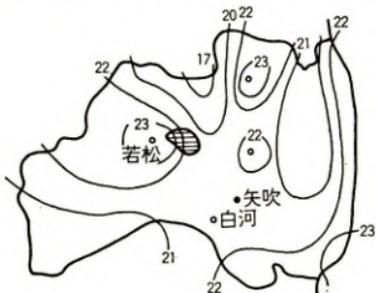
年	気温	
	最高気温	最低気温
昭和39年	33.9°C (8月17日)	-13.7°C (2月27日)
“ 44 ”	33.0°C (7月25日)	-11.5°C (1月2日)
“ 49 ”	32.9°C (8月11日)	-15.4°C (2月11日)

第一章 気 候

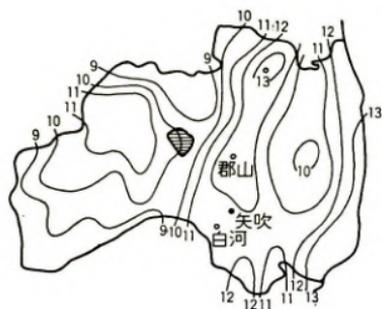
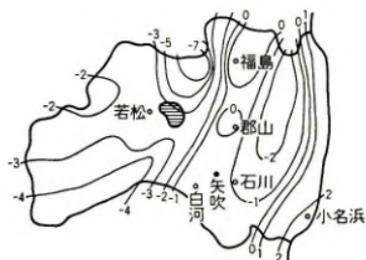
第4表 月別、冬日、真冬日、夏日、真夏日の日数 昭和49年(1974)

日 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
冬 日	31	26	23	4	2						12	27	125
真冬日													0
夏 日					7	12	16	31	10				76
真夏日					2	1	5	21	1				30

第3図 気温分布(昭和52年8月単位°C)



第2図 気温分布(昭和52年2月単位°C)



第4図
年平均気温分布図
(福島地方気象台による)

(第2、3、4図単位°C)

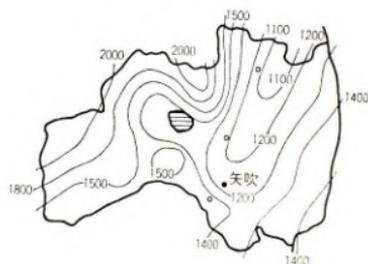
第5表 気 温 比 較 (昭和49年)

地区名 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	平均
郡 山	0.3	0.5	3.0	10.8	16.9	20.0	21.8	25.8	20.0	14.6	7.5	1.9	11.9
矢 吹	-0.6	-0.4	2.9	10.8	16.5	19.6	21.5	25.1	19.7	13.9	7.3	1.7	11.5
白 河	-0.5	-0.3	2.5	10.5	15.8	18.9	20.5	24.2	18.8	13.7	6.9	1.4	11.0

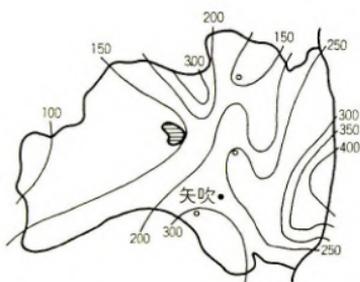
第6図 降水量分布(昭和52年2月)



第5図 年間降水量分布図(福島地方気象台による)



第7図 降水量分布
(昭和52年8月)



(第5、6、7図は単位mm)

て稀である。

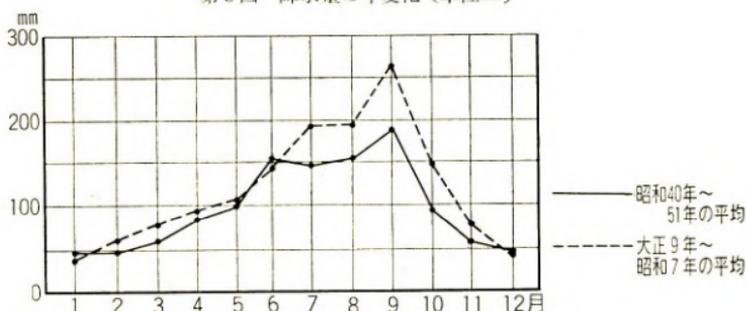
同じ中通りで隣接の郡山・白河と矢吹の気温を比較してみると、年平均で郡山が最も高く、次いで矢吹・白河の順に低くなっており緯度と逆の傾向を示す。これは海拔高度差等によるものと考えられるが、その差は一度以内である。

二 降水量

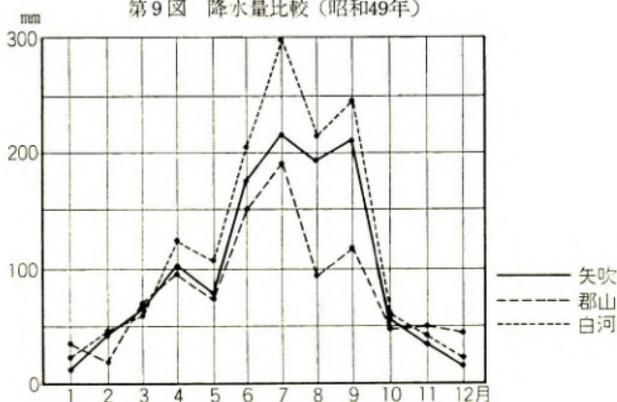
降水量が二、〇〇〇ミリメートル以上の地域を多降水量地域、一、五〇〇ミリメートル以下を寡降水量地域としているが、矢吹は一、二〇〇ミリメートル程度であるので後者に属し、年変化の型からみると表日本型といえる。降水量は、気圧・気温など他の気象要素に比べて変動が大きい。大正九年には二、〇〇〇ミリであったのに対し、大正十五年一、〇八五ミリメートル、昭和五十二年が一、〇九二ミリと約半分となっている。

降水量の年変化をみると、十一月から四月にかけて少なく、梅雨期の頃から秋にかけて多い。特に九

第8図 降水量の年変化(単位mm)



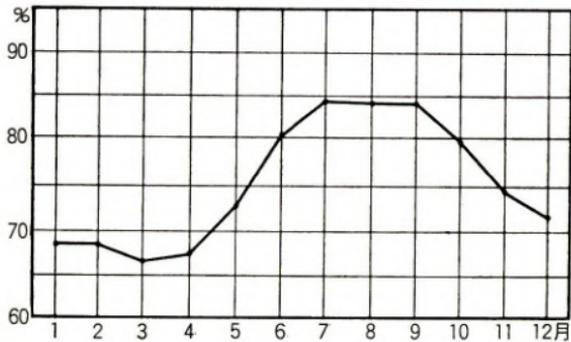
第9図 降水量比較(昭和49年)



第6表 降雪日数と降雪量(郡山と白河)

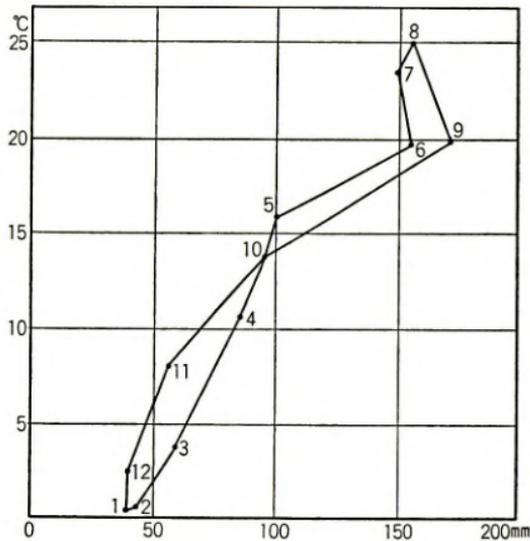
		月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計	
昭和44年	郡山	降雪日数	24日	21日	18日	3日							3日	22日	91日	
		降雪量	80cm	53cm	76cm	16cm								0cm	16cm	241cm
	白河	降雪日数	24日	20日	15日	5日								3日	19日	86日
		降雪量	23cm	37cm	41cm	22cm								1cm	5cm	137cm
昭和49年	郡山	降雪日数	21日	18日	18日	2日							4日	21日	84日	
		降雪量	50cm	53cm	31cm	0cm								0cm	44cm	178cm
	白河	降雪日数	21日	23日	14日	1日								6日	21日	86日
		降雪量	27cm	53cm	35cm	0cm								0cm	25cm	140cm

第10図 湿度の年変化(単位%)



第11図 降水量と気温

クライモグラフ(昭和40年~51年までの平均
グラフの数字は月を示す)



月が最高である。これは停滞前線や台風の影響によるものと考えられる。次に矢吹・郡山・白河の降水量の年変化を比較すると、同じ中通りでも地域により差があり、白河が最も多く、郡山が少なく、矢吹はちょうどその中間量であり、気温と逆の形を示している。

冬、低気圧が日本付近を通過した後、大陸の高気圧が張り出し、季節風が強くなったり、低気圧が本州の南海上を東北東に進む時などには、中通りや浜通りに雪やみぞれが降ったりする。矢吹では、中通りの山沿いや、会津地方のように根

雪となることはほとんどない。

矢吹の降雪・積雪についての確かな記録がないので郡山と白河の資料を示した。矢吹は大方この中間と考えればよいと思う。十一月中旬から四月上旬までが降雪の月であり、特に降雪量は一、二、三月が多い。

湿度は、降水量・晴雨・気温などとの関連もあり、その年によりかなりの相違があるが、冬から春にかけては低湿であり、夏から秋のはじめにかけて高湿となる。湿度が高くて不快を感じるのは、梅雨の六月頃から九月上旬のいわゆるむし暑い残暑の頃までである。

降水量と気温の関係について見ると、高温の季節には降水量が多くなっている。降水量を横軸に、気温を縦軸にとり、各月の降水量と平均気温を記録したのがクライモグラフである。これによると矢吹は関東に似た温暖湿潤気候と考えられる。

三 風

風は気圧配置は勿論、地形・地物により大きな影響をうける。矢吹町は平坦丘陵地であるので比較的強い風が吹くこともあるが、年平均では風速は毎秒二メートル程度と記録されている。冬は太平洋の高気圧の勢力が弱く、大陸の高気圧が強く、寒冷で乾燥した大陸の高気圧におおわれ強い北西の風が卓越するが当地域では北風が多い。春になると気温で湿った太平洋の高気圧が次第に強まり、逆に大陸の高気圧は弱まり、両高気圧の勢力の交替する時期であるので、低気圧の発達に伴ない強い突風となることが多い。六月頃にはオホソクク海方面に発達した高気圧が、日本海や三陸沖に張り出し、冷たい北東風を吹きつけ、高温多湿の小笠原高気圧との間の前線が停滞し梅雨前線となる。この時期は一年中で最も風の弱い時期である。夏は太平洋の高気圧が強く日本をおおい、南高北低の気圧配置となり、南よりの風が多く吹き、高温多湿の日が続く。秋になると、太平洋高気圧が次第に弱まり、大陸の高気圧が勢力を強めるため、東西に走る前線が日

本附近に南下停滞し、梅雨ばいうのような天候が続くが、これが秋の長雨、秋霖あきぐしである。しかし梅雨ほどはつきりした現象ではなく、その期間は短かい。十月頃には大陸高気圧がさらに強まり、前線が南下し、雨期も終り、さわやかな秋晴れとなる。十一月には大陸高気圧がさらに強くなり季節風が吹く、風向の年変化は、冬は北または北西、夏は南寄りの風、春と秋には西寄りの風が多い。また、夜から朝にかけて弱く、日中十四時～十五時頃最大風速となり易い。一年を通じてみると風速変化は平均して冬と春が大きく、夏や秋は割合に小さい。

(佐藤 隆)

第二章 矢吹町の地形と地質

一 矢吹町の地形

矢吹町の地形は三つの要素からできている。一つは矢吹が原とよばれ矢吹町を特徴づけ、羽鳥用水の潤うるす平地、二つは、広い平地に浮ぶ島のような東西方向にのびる丘陵、三つは、矢吹町の東と西を流れる阿武隈川と、隈戸川をつくる段丘群まきゅうぐんと氾濫原はんらんである。

また、それぞれは形成された時代も異なっている。

台地の地形

矢吹が原は南西部で二九〇メートル台で、北方・東方にしないで高度をさげ、二八〇メートル台になつていて、平坦な地形面を作っている。現在では、隈戸川・阿武隈川の低地から見ると台地状に見える。また、新しい時代に形成された浅く長くつづく谷によって、表面の一部が削り取られている。

矢吹が原と同じような台地状の平坦な地形は、郡山・須賀川・鏡石・中島村と広い分布を示している。とくに、化石が

第1図 矢吹町の地質図



多量に産出し、詳細に調査されている郡山市より名前をとって郡山面とよばれている。

丘陵の地形 矢吹が原のこの広い平坦面に、

東西方向に島状に丘陵が分布するが、これらは石英安山岩質の火砕流堆積物からできている丘陵で、この堆積物を白河石・三城目石とよんでいる。

現在は丘陵となっているが、西方の火山より噴出し、矢吹に堆積した当時は、現在の白河布引山のような平坦な地形であったと考えられている。現在の姿は、浸食をうけ、平坦な地形は破壊され、丘陵となっているが、それらの頂部は西方で三三〇メートル台、東方で三〇〇メートル台におさまることからかつての平坦さをうかがえる。

また、丘陵頂部の伸びる方向は東西方向であり、かつては河川が西方より白河石からできていた平坦な地形に流入し、阿武隈川にそそいでいたと考えられ、時間の経過するにつれてこの平坦な地形が河川によって浸食され、しだいに平坦さが失われ、丘陵化していった。そして、これらの丘陵間の凹地を砂礫・粘土が埋め、丘陵頂部が島状に分布するようになった。この砂礫からなる平坦な地形が矢吹が原であり、矢吹町の地形の原形がつくられた時でもあった。

段丘地形

矢吹が原台地は、現在阿武隈川と隈戸川によって東西両側を削られているが、削りとられていく過程が両河川沿いに段丘地形として残されている。段丘は大別して三つのグループに分けられ、低い方から沖積段丘・第一段丘・第二段丘である。

これらの段丘の形成に際し、両河川の河床の低下があったことは明らかであり、河床の低下をもたらした原因として、背梁山地の隆起による河川勾配こうばいの増加、郡山盆地の沈降に伴う河川勾配の変化、気候の大規模な変化による降水量・植生などの河川環境への影響の変化などが考えられる。

また、両河川の河床の低下に伴い、矢吹が原には浅い谷が刻まれるようになった。とくに、阿武隈川に向かう谷は、東本線付近から東方へ細長い谷となっている。それぞれの地形の分布は第一図を参照してほしい。

二 矢吹町の地質

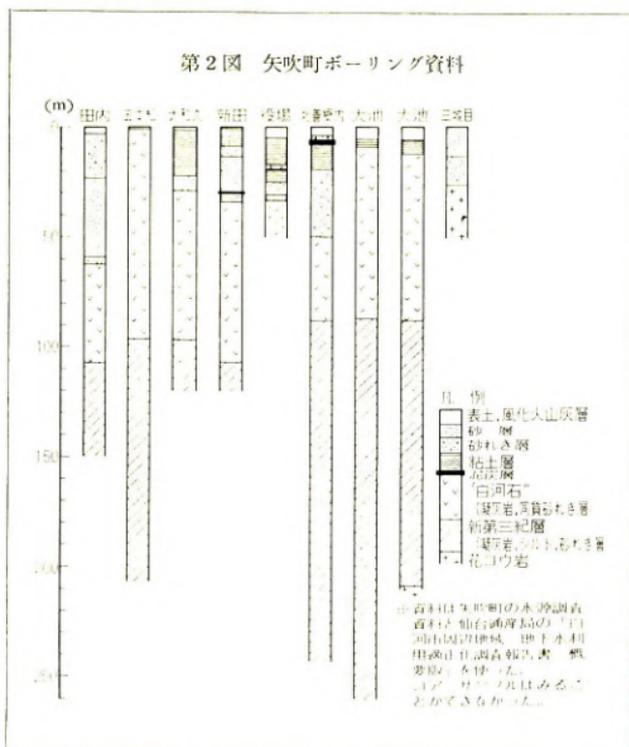
丘陵・台地と低地は、それぞれの地形に対応した地質によって構成されている。丘陵は、石英安山岩質の凝灰岩とこの凝灰岩の二次堆積物から構成されており、台地は、礫・砂・粘土といった埋積谷堆積物で構成され、また、新しい低地については、阿武隈川・隈戸川流域は砂・礫で構成されており、台地を刻む谷の低地は、砂・シルト・粘土で構成されている。

古 生 代	中生代	第三紀	
		中新世	鮮新世
		1000	500
	1000	500	500
	花 コ ウ 岩	グリーンタフ層(50m+)、 凝灰岩、 流紋岩、 砂岩、 礫岩	
<p>この時代はグリーンタフ変動とよばれる地殻変動の激しい時期にあたり、阿武隈山地以西では断崖、陥没がおこり、矢吹町は海底に沈没した。地殻変動によりグリーンタフ層(緑色凝灰岩層)を堆積させた。矢吹町地下200mより存在、西方の山々には露出している。</p> <p>古生代には、阿武隈山地は安倍族造山運動(アルプス山脈をつくるような運動)の中心地であり、矢吹町もこの山脈の一部にふくまれていた。その後ずうっと浸食され造山運動の主原動力であった花コウ岩が地表にまで露出するにいたった。この浸食量は二数キロメートルにもおよぶと考えられる。</p> <p>明新付近では、阿武隈山地のつくつている古期花コウ岩が白河石におおわれて存在する。</p>			

丘陵の地質

丘陵は石英安山岩質凝灰岩からできており、陸上火山活動による火山碎屑流堆積物として堆積している。(以下、火砕流とする) 矢吹町周辺の火砕流は西方の鎌房山付近より噴火→流出してきたと考えられる。(以下、火砕流とする) 矢吹町周辺の火砕流は西方の鎌房山付近より噴火→流出してきたと考えられている。また、同じような火砕流は、南は黒磯町、東方は石川町、北方は郡山・三春町でも分布し、同時代の同様な噴出物は会津盆地南方に広く分布している。日本においても有数の火砕流堆積物として知られている。

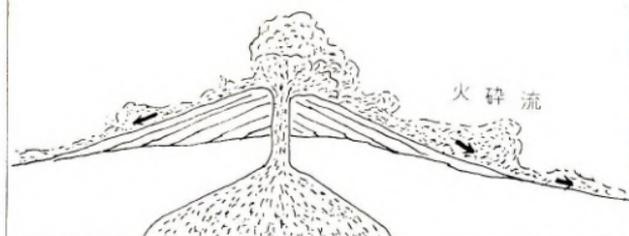
火砕流を噴出させる火山は、石英安山岩→流紋岩質マグマを活動させる火山に多く、これらのマグマの成分は二酸化ケイ素の量が多く、きわめて粘性が強いことがあげられる。つまり、マグマが貫入し上昇してくる時に、強いねばりけのためマグマ中の気体成分(水蒸気が多くを占め、これが上方からの強制的な圧力のためマグマ中に溶けこんでいる)がスムーズに出られず、とじこめられた形で存在している。この状態でマグマが上昇し、地表に近づくとつれ、気体成分をとじ



こめておこうとする上からの圧力が減少していき、マグマ中の気体成分の圧力がこの圧力を突破すると、一斉に気体成分がマグマの中で発泡する。この圧力によってマグマ全体が大きく膨張し、火山は大爆発し、多量の火山砕屑物を激しく噴出させる。時には山体が崩壊してしまうこともあり、あとにカルデラを作る場合もある。

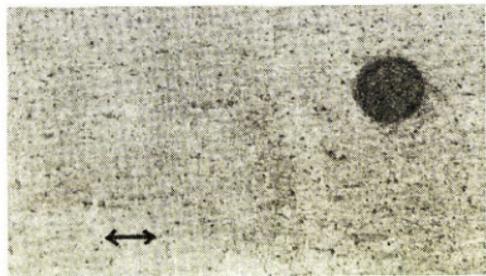
この時、火山砕屑物は上方へも噴き上げられるが、激しくかく乱された高温の破片とガラスからなる密度の大きい部分が、地表の大まかな凹凸に従って、粉体の乱流となって地形の低い方へとなだれのように流下する場合がある。これが火

第3図 火砕流を噴出する火山活動
(『地形図論2』より)





陣ヶ岡・三城目石採石場、溶結したDⅡ層



溶結したDⅡ層（陣ヶ岡）

⇔印の方向にガラスが流れたあとがみられる。つまり堆積した時はガラスがとけるぐらい高温であったことを示す。約600℃～700℃であったと考えられる。このため厚く堆積した場所ではこのように固く、溶岩のようになる。これを溶結凝灰岩といっている。硬貨は10円玉。

砕流という現象である。

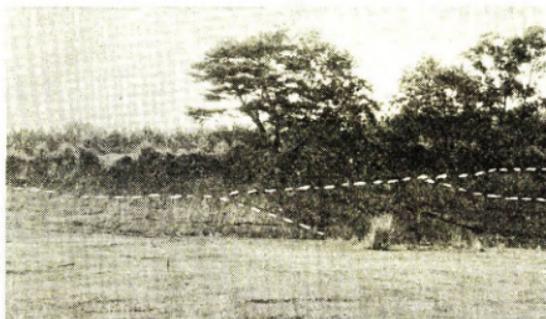
また、このような高温の火砕流からは、まだ出し切っていないガスが噴出しながら流下してくるため、火砕流底部のガスはちょうどクッションの役目をはたし、流下する際の地表との摩擦を少くなくし、高速で、しかも地表の小さな凸凹を無視して流下する火砕流現象をとる。

したがって、火砕流による

地形は、底部はもとの地形の凹凸をうめる形となり、上限はゆるい平坦な地形をつくる。布引山とか、何何平とか呼ばれる地形がこれである。矢吹町西方にみえる白河布引山も、赤面山付近からながめると、シート（布）をひろげる時の様子そっくりであり、噴火当時の地形をのけている。矢吹町も、かつての噴火当時の堆積原因は残していないが、一面灰色の草木など一本もない荒涼な平坦地であったと想像される。

矢吹付近では火砕流堆積物の厚さは西方で厚く、東方に厚さを減じている。ボーリング資料でみると、台地の下にも広く分布している様子がしれる。模式地である白河付近では、この火砕流堆積物は三層に分かれているが、とくに矢吹付近では溶結したDⅡ層（三城目付近）と、未固結、あるいは風化が深くまですすんだDⅠ層（五本松付近）がよくみられる。

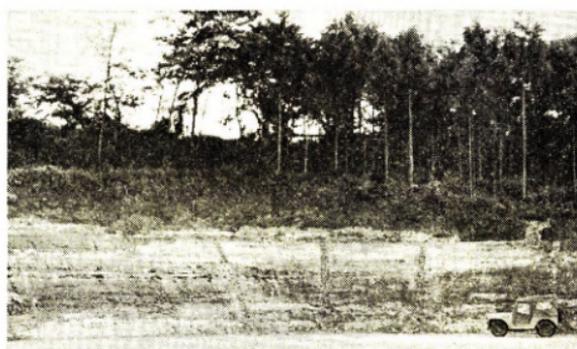
第二章 矢吹町の地形と地質



新しい火山灰A、
B層
→
凝結した二次的
溶岩的堆積物

層C 火で化している灰土
層D 古い灰土にして古山粘りする

火山灰と2次の堆積物（矢吹中学校南方の崖）



矢吹家畜市場の崖

郡山層の上部がみられる。崖の3分の1は火山灰。3分の2が郡山層、礫水の軽石、粘土化した火山灰を多くはさむ崖の下部よりエゴノキの種子の化石が出る。

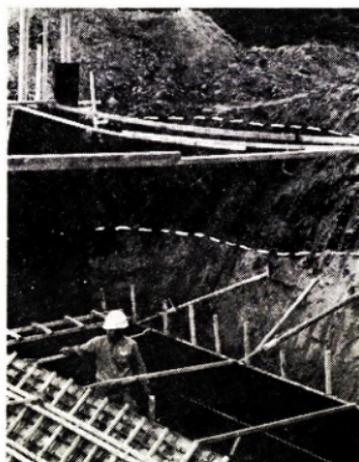
また、矢吹町にはD層の上に火砕流が噴出・堆積したあとで、すぐにそれを削って堆積したと考えられる。二次的な葉理（堆積時にできる砂・火山灰によるスジ）のよく発達した凝灰岩層が二五メートルぐらいの厚さで堆積している。矢吹上南方の崖、矢吹高校の周辺でこの堆積物が観察される。東方では陣ガ岡の集道沿い、堤の谷底にも広く観察される。この堆積物は、堆積の様子から火砕流の堆積して地形の水のたまっていた凹地をすみやかに堆積したものと考えられる。葉理から堆定される当場の次の流れは、南から北の方向である。

台地の地質

台地を作っている地層は、砂・

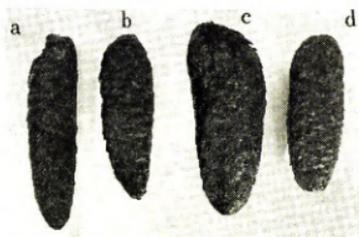
粘土・泥炭・シルト・礫で構成されている。この地層は郡山層と呼ばれ、洪積世中期に堆積したことが知られている。この郡山層と一括される地層の分布は広く、この時代には郡山以南の中通り一帯は広い沼沢地として存在していて、現在の中通りの平坦地の原形が形成された。

矢吹付近の郡山層は、白河石の丘陵間の谷を埋積する形で存在するが、地表では白河石との直接の関係は観察されない。ボーリングの資料

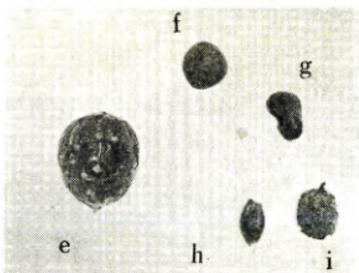


←もり土
台地を削む
細長い谷
の地質
←谷をうめた
砂・粘土層
←溶結凝灰岩
の2次的堆
積物
細かいラミ
ナがみられ
た

堤の南の橋の工事現場



a、エゾマツ b、d、ヒメバラモミ
c、ヤツガタケトウヒ (×0.8)



e、オニグルミの堅果 f、オオバボ
ダイジュの種子 g、チョウセンゴヨ
の種子 h、エゴノキの種子 i、ハ
ンノキの種子 (×0.8) hとiは現在
の矢吹でもみられる。

る。

台地の地質が良く観察される所は、国道四号線沿の矢吹家畜市場付近と堤付近があげられる。とくに堤の南側の崖では、泥炭層・砂層より多量の植物化石が産出する。下部よりヒメバラモミ・エゾマツ・ヤツガタケトウヒの榧果・スモモの核果・チョウセンゴヨウの種子、上部より、オニグルミの堅果・エゴノキ、ボダイジュの種子が産出している。(第9図、第10図)

とくにこれらの植物化石は砂層中に多産しており、化石の破損も少なく、堆積した場所からすぐ近くから運ばれてきた。現地性の化石と考えられ、当時の矢吹の気候を知るうえで大切な資料となっている。これらの植物化石は、いずれもが現在の矢吹町ではみることのできない植物であり、とくに下部の化石はこの地層の堆積した当時の寒冷な気候を示し、

当時の気温が年平均で八〜一〇度も低くかったことをあらわしている。このような時期を氷河時代、ないしは氷河期と呼んでおり、世界全体が寒冷な気候にさらされた。上部的化石は、それよりもやや温かな気候を示し、全体として寒冷から温暖へ向いつつあったことを示している。

風化火山灰層

矢吹町一帯は那須火山から飛ばされてきた火山灰におおわれている。現在は風化して、かなり粘土質になっており、普通、赤土と呼ばれている。火山灰はA層・B層・C層・D層に新しいものから分けられている。また火山灰は、噴出した火山に近づけば層厚を増し東方へ遠ざかるほど層厚が減る。矢吹付近では、A・B層は白河付近ほど明瞭に存在せず、C・D層は厚く存在している。また火山灰は白河方向へ厚さをましている。第6図の矢吹中南方の崖では全部の關係があらわれている。

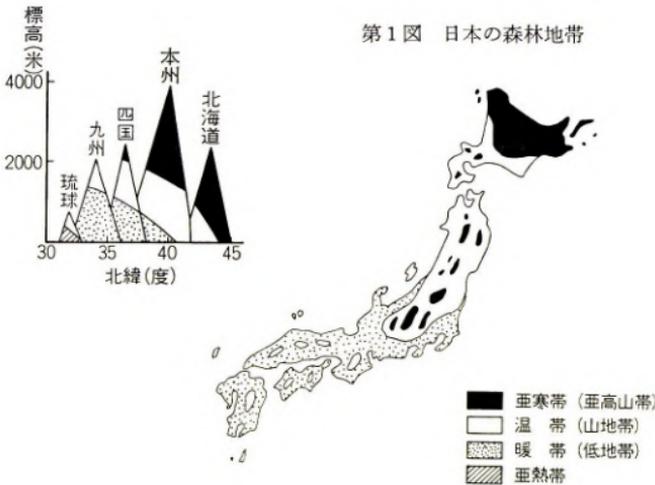
とくに、C・D層は、軽石・スコリア・火山砂が層状に多く入っており、全体として粘土化が進んでいるが、当時の火山活動の激しさを充分語ってくれる。C・D層は、白河石からなる丘陵と、白河石の二次的堆積物からなる丘陵の上をおっている。郡山層上には分布しないが、郡山層中には、軽石の礫・粘土化した火山灰とみられるものが多く存在し、C・D層の火山灰が地層形成中に混入したと思われる。A・B層は黄褐色〜赤褐色のあまり粘土化の進んでいない火山灰で、赤橙色の風化した軽石の二〜三ミリメートルのつぶを点在させるぐらいで均質である。また、分布は前のC・D層の上や、段丘堆積物を直接に堆積している。

(阿部 健一郎)

第三章 植

物

第1図 日本の森林地帯



世界の植物帯から見ると日本は北帯の東亜植物区系に属している。沖繩から北海道まで、南から北へ約三、〇〇〇キロメートルにも及んでいるため、生育する植物の種類も面積の割合にはきわめて多い。日本の植物帯を気候帯に対応して次の四帯に大別している。(第1図は日本の森林帯を示す)。亜熱帯：琉球沖繩地方で年平均気温が二一度以上。暖帯：九州、四国、本州西南部、年余均気温一四度～二一度。温帯：本州北部と北海道西南部、年平均気温六度～三度。亜寒帯：北海道東北部、年平均気温六度以下の地域。また、本州中部を例にとり垂直的に見ると、標高五〇〇メートル位までを低地帯(丘陵帯)と呼び、シイ・カシなどを主とする常緑広葉樹林で代表される。標高五〇〇～一、七〇〇メートルを山地帯(低山帯)と呼び、ここには、ブナ・ミズナラ・コナラなどの落葉広葉樹を主とする温帯林、一、七〇〇～二、五〇〇メートルを亜高山帯といい、トウヒ・コマツガなどの常緑針葉樹を主とする亜寒帯の植物、二、五〇〇メートル以上になると高木は姿を消し、低木や草本群落を

第2図 現 存 植 生 図



主とする高山帯となる。この垂直分布は南にいくにしたがって高くなり、北にいくにしたがって低くなる。たとえば森林限界の標高は、富士山では三、〇〇〇メートル、福島県の高山では二、〇〇〇メートル、北海道では一、〇〇〇メートル位である。水平分布からすると福島県の浜通り低地は暖帯、その他の低地や低い山地では温帯にあたる。矢吹町は、東には阿武隈山地、西に奥羽山脈があり、その間の中通り南部に位置し、平均標高二九〇メートルの平坦丘陵地帯にあり、年平均気温が一二度前後、温帯と暖帯の境にあたる地域である。平坦地のため植物の種類としては変化に乏しいが、暖帯性の植物なども混り、また、北限と考えられる植物などもあり、比較的興味深い地域と考えられる。

一 現 存 植 生

矢吹町管内の現存植生図を第2図に示した。

航空写真と現地調査により作成したが、植生状

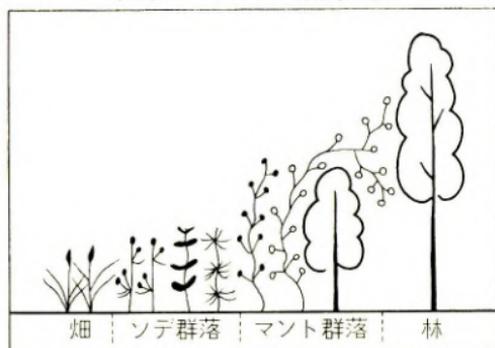


マント群落 (中畑)



ソデ群落 (矢吹)

第3図 マントソデ群落模式図

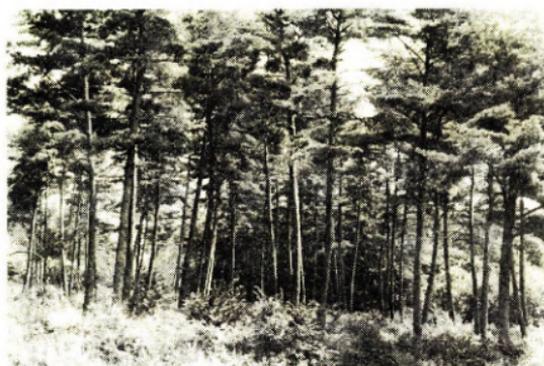


マント・ソデ群落

況は近時急速に変化していること、及び縮尺の関係できわめて大まかであり、じゅうぶんとはいえないが、管内植生の概況を知ることが可能かと思う。すなわち、当地域の代表とも考えられるコナラ林と植栽されたアカマツ・スギ林が多いこと、それに矢吹が原の開拓事業による水田畑地がきわめて多いことが見られる。これらの現存植生の大部分は、人間が長い年月の間に自然植生を破壊したあとに生じたものである。つまり自然植生が、人間によっておきかえられてきた代償植生である。

林や垣根の周囲、川辺の斜面などをおおうように生育しているつる植物や、低木を主とした群落をマント群落という。こ

の構成種は次のようなものである。クズ・ヤブガラシ・カナムグラ・ヤマノイモ・トコロ・スイカズラ・ミツバアケビ・カラスウリ・フジ・ノブドウ、低木としては、イボタノキ・ムラサキシキブ・ウツギ・キブシ・ニワトコ・スルデなどである。また、垣根や林縁にそってその周辺をふちどるように带状にしげる草本からなる群落をソデ群落という。この群落の構成種は、イノコズチ・アカネ・ヨモギ・ヤブジラミ・スギナ・ツヌクサ・コブナグサ・スカキビ・イタドリなどである。これらの群落は、樹林が草原や裸地と接するところならいたるところに見ら

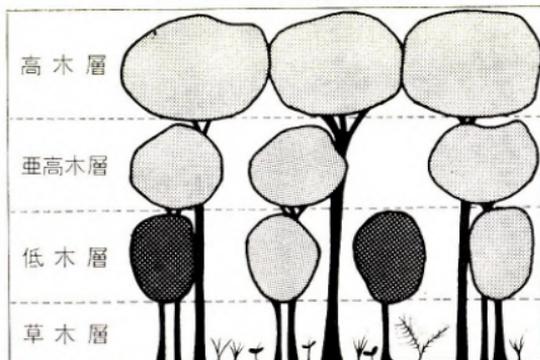


比較的明るい林床のアカマツ林 (中畑)

第1表 アカマツ二次林の組成 (中畑)

高木層 (8m以上)	アカマツ
亜高木層 (8m~2m)	コナラ・クリ・ヤマウルシ・スルデ・ウリ カエデ・ガマズミ・コシアブラ
低木層 (2m ~0.3m)	アズマネザサ・ケヤキ・コゴメウツギ・ナ ツハゼ・モミジイチゴ・ネムノキ・ヤマツ ツジ・リヨウブ・ネジキ
草本層 (0.3m以下)	ササスゲ・ヒカゲスゲ・ジヤノヒゲ・ミツ バアケビ・サルトリイバラ・チヂミザサ・ コナラ・レンゲツツジ・ワラビ・ウリカエ デ・ハリギリ・シュンラン

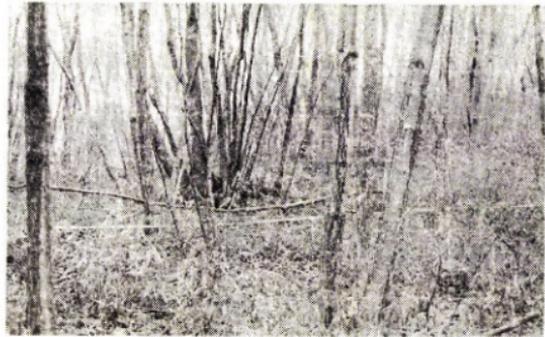
第4図森林の盛層構造模式図



れる。一見じゃまものに見えるが、森林の周辺、露出した裸地や斜面をおおい、風を防ぎ、日光の直射、大雨による土砂の流出を防ぐなど森林保護の重要な役割を果しているのであって、林内に道路ができたたり、宅地がつくられたりして森林の一部が伐採され、マント・ソデ群落がとりのぞかれたりすると、急に林内に日光や風が入るようになり、植物社会の秩序が乱れ、林内はあれた様相を呈するようになる。

アカマツ林

中通り低地は吉岡(一九五四)によると、アカマツ林区といわれ、いたるところにアカマツ林を見ることのできるが、アカマツの自然植生は、尾根すじとか岩が露出した土壌の浅い風の強い乾燥地とか、他の樹木のためた森林である。もともとアカマツの自然植生は、尾根すじとか岩が露出した土壌の浅い風の強い乾燥地とか、他の樹木の



早春のコナラ林の林床

第2表 コナラ林の組成 (コナラ直径18~22cm程度)

高木層	コナラ・クリ・ヤマグクラ
亜高木層	コナラ・ヤマウルシ・ホオノキ・スルデ
低木層	ガmazミ・ムラサキシキブ・ニシキギ・ヤマツツジ・アズマネザサ・アオハダ・ニシキギ・ヤマフジ・オトコヨウゾメ・ウメモドキ・ミツバカエデ・コブシ・スルデ・エゴノキ
草本層	ウグイスカグラ・コゴメウツギ・キハギ・クサボケ・サルトリイバラ・ヒカゲスゲ・シラヤマギク・チヂミザサ・ワラビ・コナラ・ヤマツツジ・ノイバラ・ノダケ・イチヤクソウ・オケラ・ヘクソカズラ・チゴユリ・ヤマガシユウ・ミツバアケビ・ギンラン

いし、材の用途も広いので人為的に植栽され現在にいたっている。次にアカマツ二次林の組成を示す。(第1表)

なお森林の成層構造を次のようにする。(第4図) 高木層(樹高八メートル以上)・亜高木層(樹高八メートル以下二メートル)・低木層(樹高二メートル以下)・三メートル)・草本層(〇・三メートル以下)、その他コケ層・地中層なども考えるが、ここでは上記四層とする。

コナラ林

人間によって伐採され、火入れなどによって破壊された自然林のあとに生育してくる林を二次林と呼ぶが、この二次林も代償植生(人間の影響によって変えられた植生)で、武蔵野の雑木林はその代表的なものである。矢吹地域のコナラ林も当然この仲間である。このコナラ林の多くは、一五年〜二五年に一回薪炭材とし

生育に不都合な立地に生育していたが、人間が登場し、自分達の生活域から山地にいたるまで自然林を伐採し、焼きはらい破壊した結果、アカマツは陽樹であり、その種子には翼がついていて風に運ばれ易いし、どんなやせ地でも直射日光下でもよく発芽し生長が可能であるため、人間が破壊した自然林のあとに二次的に生育し、その分布域を広げてきた。アカマツの成長は速



杉植栽林 (五本松)



竹林の林床

て伐採され、その後、切り株から萌芽^{もやし}し樹林が再生される。これがくりかえされることによって存続したものである。また、秋から冬にかけては落葉かきが行なわれたり、下草刈りが行なわれたりして人間の影響がきわめて多いために、群落を構成する植物の種類もきわめて多いのが普通である。しかし、下草刈りや、落葉かきあまりに行なわれない林では、アズマネザサが優先し林床の草本の種類が貧弱となっている。部落周辺や、耕地の間に残存している林などは人間の影響を多く受けているので、林床にはクサボケが多いのが特徴である。

杉 林

アカマツ林のように広大な植栽地はないがところどころに杉林を見ることができ、杉林は材をとるために密植されているため林床はきわめて暗いので、林床植物は少ない。

低木としては、ホオノキ・ニワトコ・ムラサキシキブ・タラノキ・アズマネザサ・ケヤキなど、草本としては、ガガイモ・ヤマノイモ・トコロ・ノブドウ・ツルマメ・ハンショウヅル・ヤマガシユウなどのつる植物、ホトトギス・フキ・ミズヒキ・キツリフネ・アカソ・チヂミザサ・イノコズチ・ヒトリシズカ・ワラビ・ソクズ・マムシグサ・シダの仲間、タケニグサ・ハエドクソウなどがみられる。

竹 林

タケの分布は熱帯・亜熱帯・温帯にわたり広く、

かつては日本にも野生していたと思われるが、現在みられるものは中国が原産地といわ

第3表 諏訪山保健保安林の植生(6月)

	コナラ林	シデ林
高木層	コナラ・クリ・ヤマザクラ・ホオノキ	イヌシデ・アサダ・ハリギリ・ケヤキ・コブシ・ヤマザクラ
高木層	アオハダ・クリ・アカマツ・ヤマウルシ	ヤマモミジ
低木層	ホオノキ・ヤマウルシ・ヤマザクラ・ハナイカダ・オトコヨウゾメ・ツリバナ・ウリカエデ・ガマズミ・イヌシデ・ヤマツツジ・ニシキギ・ムラサキシキブ・アズマネザサ・カザグルマ	ホオノキ・ヤマウルシ・ヤマザクラ・ハナイカダ・オトコヨウゾメ・ツリバナ・コシアブラ・ハリギリ・コブシ・キンギンボク
草本層	ササスゲ・チゴユリ・ヒカゲスゲ・コブシ・ヤブラン・ヤマドリソウ・タチツボスミレ・ヤマガシユウ・ハエドクソウ・ノダケ・ヤマフジ・ギボウシ・ガマズミ・ミツバアケビ・スミレサイシン	ササスゲ・チゴユリ・ヒカゲスゲ・コブシ・ヤブラン・ヤマドリソウ・タチツボスミレ・ヤマガシユウ・ハエドクソウ・キズタ・ホオノキ・クロモジ・クモキリソウ・イスドウナ・ハリギリ・シラヤマギク・クマヤナギ・ムラサキシキブ・モミジイチゴ

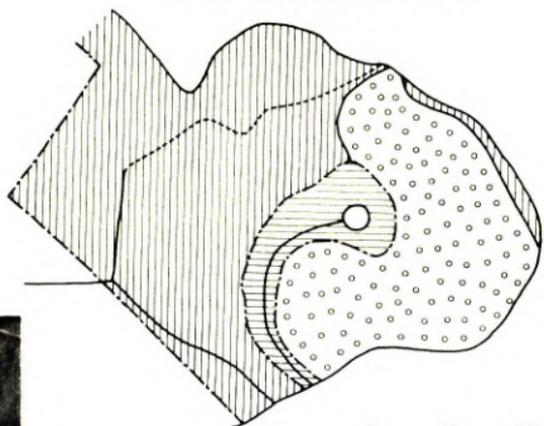
れる。マダケやモウソウチクは高温・多雨を好み、最低気温がマイナス〇度C以下のところでは生育が困難である。竹林は密に繁茂しており、林床は比較的暗いので植物の種類もあまり多くはない。前窪の竹林の林床植物を見ると、アオキ・ケヤキ・サンショウ・ツリバナなどの低木(樹高はいずれも五〇センチメートル以下)、草本として、タチツボスミレ・コウヤワラビ・ドクダミ・ウラシマソウ・ヒトリシズカ・フタリシズカ・ヤマガシユウ・サルトリイバラ・ミズヒキ・クサソテツ・アキギリ・アカネ・ヤブラン・ウバユリ・チゴザサ・チゴユリ・ツルツゲ・ソクズ・ヤブコウジなど林

縁にはトコロなどのつる植物もみられる。ところよっては林床にクマガイソウの群落を見ることがある。

諏訪山保健 町のほぼ中央、
安林の植生 役場庁舎の東北

一キロメートルにある約三・八ヘクタールの面積をもつこの森林は、神社周辺を除けばほとんどが県有地であり、伐採されなかったため、コナラ・イヌシデ・ハリギリ・コブシ・アサダなど大きなものは直径九〇センチメートル、樹齢二〇〇年程度のものが多数あり、みごとな森林を形成している。ここには矢吹町に存在する植物のほとんどが生育しているとい

第5図 諏訪山保健保安林植生図



0 50 100m



カザグルマ(上), ウバユリ(中)
ヤマユリ(下) (諏訪山)



諏訪山保健保安林全景



諏訪山 シデ林

第6図 川原植生三城目



川原植生

川の上流では、川幅がせまく流れが速いので主として浸食作用がおこなわれ、絶えず砂礫が川下に運搬され、ところにより川原ができていくが、ほとんど石ころばかりで狭く、植生もきわめて貧弱である。

中流になると、川幅は広くなり、流れもゆるやかとなるため浸食は比較的小さく堆積がおこなわれ、小石とあらい砂のかなり広い川原が形成されているが、植生は不安定であることが多い。三城目東部の阿武隈川の川原はこれに属する。

川原の最前線にはヤナギ・ミゾソバ・タデなどの群落、低い水たまりのできるようなところには、サンカクイ・ミゾソバ・イヌビエ・ギシギシ・アキノウナギツカミなどが見られる。いくらか小高く安定なところには、ヒルガオ・ヤブガラ

っても過言ではない。

次にこの森林を代表するコナラ林とシデ林の植生を示す。

(第3表)、この二種の群落の構成種はほとんどが多年生植物であり、木本植物のほとんどが冬に落葉する。草本植物の生活形は半地中植物か地中植物であるので、季節によって群落のすがたや構成種の量的割合もかわる。高木が葉を開き樹冠をおおる前に林床植物の多くものは萌芽し開花し、やがて高木へと移っていく。この植生活動の時間的ずれによって、限られた太陽エネルギーを互いに利用し共存していることになる。

この森林の林床植物で五月から六月にかけて淡紫または白色、長いだ円形の八枚のがくをもつ花を咲かせるカザグルマ、大樹の根元近くにルリ色の可憐な花を静かに咲かせるヤマルリソウ、東北の珍奇植物の一つであり、群落をなしており、山菜として珍味でもあるイヌドゥナなどは特筆すべき種類である。



川原植群 (三城目)



ヨシ・コオホネ群落 (松房池)

シ・ススキ・ケイヌビエ・オナモミ・ツユクサ・ヨモギ・オオイヌタデ・ヤブマメ・アカツメクサ・オオバコ、さらにニセアカシアなどの樹木も見られる。

池沼湿地植物群落

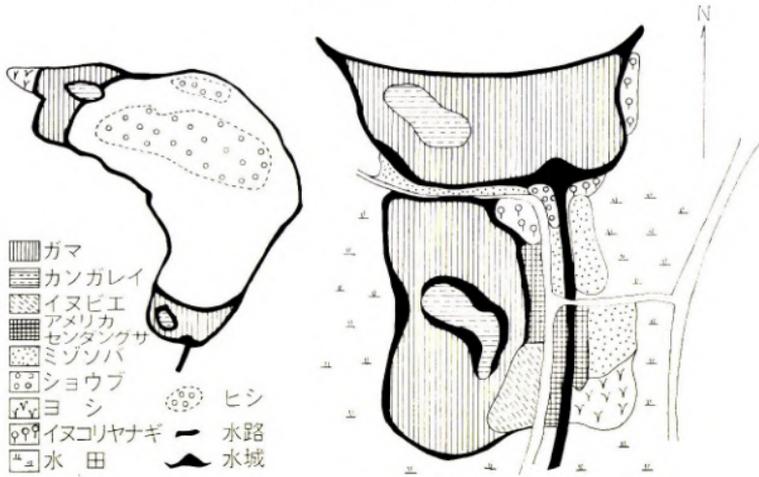
矢吹町には大小の池沼が数多く見られる。これら池沼の岸辺には湿性の植物群落や、水生の植物群落が発達しているのが普通である。

大池北部の低湿地には、ハリイ・ミタケスゲ・サギソウ・ネジバナ・シロネ・ミズゴケ・アキノウナギツカミ・ヤノネグサ・イヌノヒゲなどの湿性の植物がみられる。松倉の北方にある堤(つた)の北西部の休耕田は湿地帯となり特有の植物群落をなしている。ミズゴケ・モウセンゴケ・オニスゲ・アゼスゲ・ミカズキグサ・サギソウ・ネジバナ・チダケサシ・アカバナ・ヌマトラノオ・コケオトギリ・ミズオトギリ・サワギキョウ・シロネ・ゴウソウ・ヒオウギアヤメ・ヌマガヤ・ハリイ・アギナシ・ネコヤナギ・サワアザミ・ウメバチソウ・ミゾソバ・コナギ・ミクリ・ヨシ、また、アカマツ・ズミ・ハンノキなどの樹木が浸入している。水辺から池沼の中心に向って、ヨシ・コオホネ・ガマなどの挺(てい)水植物群落、次第に水深を増すにしたがって、ヒシ・ヒルムシロなどの浮葉植物群落、クロモ・エビモなどの沈水植物群落、水面にはウキクサなどの浮水植物群落の分布となっているのが普通である。しかし、当地域に存在する池沼は有機質多く、栄養豊富なため水がにごっているので沈水植物の生育はきわめて少ないようである。松房池の西南部ではヨシの中にコオホネが混っている。

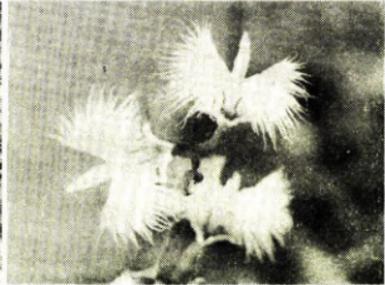
水田雑草群落

イネの栽培法は日本には弥生式土器時代に中国から伝わったといわれている。水田雑草はこの時一緒に渡来したものがほとんど

第7図 池沼湿性植物群



スマトラノオ群落 (松倉)



サギソウ (松倉)



ヨシ群落 (渡利池)



ガマ群落 (小池)



農道の雑草群落

思われる。現在、日本における水田雑草は一九〇種程度といわれ、これらが水田雑草群落を構成している。その主なものをあげると次のようになる。田のあぜにはヒデリコ・テンツキ・オオバコ・アゼガヤツリ・アオガヤツリ・ヒメタグ・ススキ・チガヤ・ヨモギ・ヨメナ・オオアレチノギク・シロツメクサ・ハルジョオン・ヒメジョオン・ヒメムカシヨモギ・コウヤワラビ・アゼムシロ・スギナ・アメリカセンダングサ・タマガヤツリ・トキワハゼ・コブナグサ・ムラサキサギゴケなど、水田の中にはアギナシ・コナギ・ヘラオモダカ・オモダカ・ウリカワ・タイスビエ・ヤナギタデ・サナエタデ・タガラシ・キツネノボタン・ホシクサ・タネツケバナ・スカシタゴボウ・ウキクサ・オランダガラシ・イスノヒゲ・イボクサ・セリ・アブノメ・タウコギ・タビラコ・コウガイゼキショウなどきわめて多い。

路上・路傍
植物群落

路上・路傍植物は種子の生産量がきわめて多く、風・動物・人によって広く散布され、また発芽力がよく、繁殖・生長が旺盛である。しかし、人や車の往來の激しい道路では植物は

生えることが不可能であるが、あまり激しくない農道のようなところでは道路に添って帯状に植物が生育する。比較的踏みつけの多いところでは背の低いオオバコ・ミチヤナギ・オヒンバ・スズメノカタビラ・ニワホコリなど、特にオオバコは絶えず踏みつけられるという人為的条件のところにも生育している。すなわちオオバコは人為条件に対してきわめて抵抗力の強い植物であるからである。道の両側など人や車に踏みつけられる回数が少ないところには、ヨモギ・ハルジョオン・ヒメジョオン・アカツメクサ・シロツメクサ・ススキ・ヤハズソウ・メドハギ・ヒメムカシヨモギ・カモジグサ・オオアレチノギクなど、草丈の高くなる植物が多くみられる。



陣屋の二本ガヤ

第4表 畑の雑草目録

カヤツリグサ・コゴメガヤツリ・ナギナタ コウジュ・アレチノギク・ヒメジョオン・ ハルジョオン・クルマバザクロソウ・ツメ クサ・ニワホコリ・フタバムグラ・ザクロ ソウ・ヘビイチゴ・ミツバ・ガガイモ・キ ュウリグサ・ニガナ・ヂシバリ・トキワハ ゼ・ムラサキサギゴケ・ニワヤナギ・タチ ツボスミレ・ヤブガラシ・セイヨウタンポ ポ・カラスビジャク・ノボロギク・ニシキ ソウ・コニシキソウ・オオイヌノフグリ・ タチイヌノフグリ・ハコベ・ウシハコベ・ ミミナグサ・ナズナ・ノミノフスマ・アカ ザ・コアカザ・シロザ・アオビユ・ツユク サ・カタバミ・イスタデ・ハルタデ・サナ エタデ・スベリヒユ・クワクサ・エノキグ サ・エノコログサ・イヌビユ・ケイヌビユ ・メヒシバ・オヒシバ・ホトケノザ・カキ ドオシ・ヤエムグラ・メナモミ

畑の雑草群落

雑草は人間が管理しているところならば、どこにでも生える。いくら草をとっても耕しても雑草を一本もなくすることは容易ではない。

雑草の種子は一般に小さく、そしてきわめて軽く、風や人その他あらゆるものに付着し混入して運搬され、散布され易くできており、その上、悪条件に対する抵抗力がきわめて強く繁殖力が旺盛である。畑地雑草群落を構成している植物の約八〇パーセントは一年生植物である。ついで、カラスビジャク・ドクダミのように越冬芽が地中にある地中植物や、越冬芽が地表に接しているジシバリ・タンポポ・オオバコなどの接地植物である。耕地の手入れが悪くなる程、接地植物の占める割合が高くなり、一年生植物の割合は減少する。厳密に言って日本固有の畑地雑草はほとんどなく、外国から侵入したものとされる。以下その主なものを記録する。(第4表)

二 天然記念物・古木、その他

県指定天然記念物(陣屋の二本ガヤ)

所在地 西日河郡矢吹町大字中畑字本村五七

所有者 岡崎憲太郎



五本松の松並木

五本松自然環境保全地域

昭和四十九年二月十二日県指定、史蹟五本松の松並木として昭和五十二年七月二十六日矢吹町指定。五本松と泉崎村踏瀬間の旧四号国道の両側には合計二二三本のアカマツがあり、みごとな松並木をなしている。このうち道路北側の一一六本が矢吹地域に属している。太いものは目通り幹囲り二四七センチメートルもある。目通り幹囲り一五〇〜一八〇センチメートルのものが多く、樹高は二〇メートル、樹齢は太いもので一三〇年、その他は九〇年前後と推定される。この松並木は松平定信の時代に領内の街道に松苗二、三〇〇本を植えたのが始まりであるといわれ、明治十八年



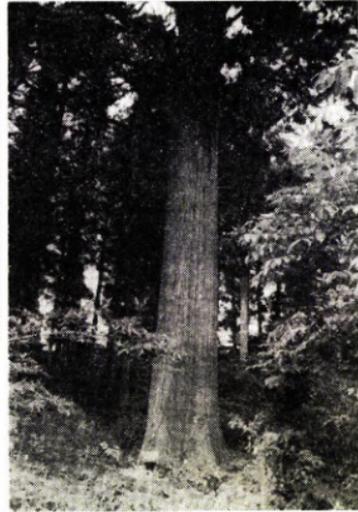
古山王の種蒔桜

昭和四十六年四月一四日指定

この二本カヤは、岡崎氏宅地内にある。ここは天保八年（一八三七）に当地方の領主となった旗本松平軍次郎の陣屋で、陣屋建設当時すでにみごとに生育していたので残したと記録され、南北に一メートルの間隔で並立している。南側のカヤは根囲り五・二メートル、地上六〇センチメートルの幹囲り五・一八メートル、樹高二〇メートル、樹冠は一三メートルと一八メートル。北側のカヤは根囲り四・八メートル、地上六〇センチメートルの幹囲り四・〇三メートル、樹高一九メートル、樹冠は一メートルと一七メートルと広がっている。樹高は既指定のものより高い。大木のわりに樹勢が良く、旧陣屋庭園内にあることなどから貴重である。



山王寺の臥竜の松



中畑澄江寺の大杉

(一八八五)頃補植したものである。
歴史上からもまた、自然環境上からも大変貴重な松並木である。

古山王の種蒔桜

大和久井戸尻にある推定樹齢二三〇年のエドヒガンで、花は淡紅色、目通り幹囲り四・三

七メートル、地上二・二メートルより数本に枝分かれしている。

樹高一〇メートル枝張りもよく、また、樹勢も旺盛、本町のサクラの中では老巨木である。また、桜の根元近くに清水があり、桜清水といわれ、いまでも滾々と湧きでている。

山王寺の臥竜の松

大和久山王寺境内にあるクロマツで樹形がすばらしく、樹勢も旺盛、根元より二メートルの幹囲りが一・五三メートル。大して太くはないが樹齢一七〇年の老松である。当地域は、アカマツ林区といわれアカマツがほとんどであり、クロマツの植栽された大樹はきわめて少なく貴重なものである。

澄江寺の大杉

スギはまっすぐに伸びるといふ意味の「直」が語源。スギの一番多いのは日本で、世界的に有名であり、昔から神社や寺によく植樹され、民俗的にも縁が深い。中畑澄江寺の裏側にあるスギは、本町内では最大のものと思われる。目通り幹囲り六・〇六メートル、樹高三〇メートルを越し、推定樹齢四〇〇年、近寄ると年輪の重さに圧倒されそうになる。

長 峰 の 松

長峰の田圃の中にあるアカマツで、目通り幹囲二・三メートル、地上一・五メートルより二枝に分かれ、樹高九メートル、樹冠のひろがり一五メートル、樹形よく、樹齡一・二〇年程度と推定される。

恩 賜 林

西白河郡矢吹町大字中畑文京町、県道矢吹石川線の南面にある約七、八ヘクタールに及ぶアカマツを主とし、コナラ・クヌギの混じった樹林で、樹勢も旺盛、野鳥も数多く生息している。これは、今上天皇御即位記念に御下賜になった恩賜金により植林したものとされる。昭和二十二年八月十九日天皇東北御巡幸の折、現矢吹中学校校庭西端の御野立山に御立ちになり、樹林や矢吹が原の開懸状況などを御視察になった。

谷中八槻さ ニレ科の落葉大高木・大木となるので昔はよく一里塚に植えられた。この大槻は八槻神社の神木として植栽されたもので左右二木であったものが太くなり連結したように見える。



長 峰 の 松



恩賜林の一部

一本は幹囲四・四五メートル、他は三・八九メートル、生長は比較的速いので、樹齡は一〇〇年程度と推定される。

コアジサイ ユキノシタ科の落葉低木で、シバアジサイともいう。林陰に多く、葉は対生倒卵形で鋭い鋸歯がある。五、六月頃集散花序をなし、淡青色の小花を多数つける。矢吹地域が北限と考えられる。

ニセアカシア マメ科植物の落葉高木で帰化植物、アカシアとは異なる。とげがあるのでハリエンジュともいう。北アメリカ原産で、日本には明治の初めに伝えられたといわれる。街路樹・庭



コアジサイ



ニセアシアの花



ハキダメギク



八槻さまの大榎



川筋のニセアカシア

木とされたり、繁殖力が強いので土砂くずれを防ぐためにも植えられる。日当りのよいところを好み生長はきわめて速い。土手・川筋とか林の縁に多いが林の中にも次第に侵入しつつある。公害にも寒さにも強い。花は白色蝶形花で総状花序をなし芳香がある。

ハキダメギク この種も帰化植物でアメリカ原産、大正時代東京附近でまれに見られたが、現在では各地に広がり、東京附近では普通の雑草となっている。腐植質（土の中で有機物が不完全に分解してできたもの）に富んだ空地や畑地に見られるが、最初、ゴミのはきだめに生えていたものでこの名がつけられた。現在矢吹町内にも多く見られるようになった。

第5表 矢吹町の植物目録

科 名	植 物 名	科 名	植 物 名
キ	ク	キ	ク
	ハハコグサ		ノブキ
	チチコグサ		メナモミ
	ミズギク		コメナモミ
	カセンソウ		タウコギ
	オグルマ		アメリカセンダングサ
	ガンクビソウ		オケラ
	コヤブタバコ		ノアザミ
	センボンヤリ		キツネアザミ
	コオヤボウキ		コオニタビラコ
	ナガバノコオヤボウキ		コオゾリナ
	キッコウハグマ		セイヨウタンポポ
	オナモミ		カントウタンポポ
	ブタクサ		ヂシバリ
	ヨツバヒヨドリ		ニガナ
	ヒヨドリバナ		アキノノゲシ
	アキノキリンソウ		ノゲシ
	ヨメナ		ヤクシソウ
	アズマギク		オオヂシバリ
	ハルジョオン		フジバカマ
	ヒメジョオン		ハキダメギク
	アレチノギク		ソバナ
	オオアレチノギク		ホタルブクロ
	ヒメムカシヨモギ		ツルニンジン
	シラヤマギク		キキョウ
	ンオン		サワギキョウ
	ノコンギク		ミゾカタシ
フキ	ツリガネニンジン		
モミジガサ	アマチヤヅル		
ノボロギク	キカラスウリ		
カニコオモリ	カラスウリ		
コオモリソウ	スズメウリ		
イヌドウナ	オミナエシ		
ヤブレガサ	ニワトコ		
トキンソウ	ソクズ		
オトコヨモギ	オオカメノキ		
イスヨモギ	ガマズミ		
ヨモギ	オトコヨウゾメ		
ヒメヨモギ			
		キ	キョウ
		ウ	リ
		オ	ミナエシ
		ス	イカズラ

スイカズラ	スイカズラ キンギンボク ウグイスカグラ	シ	ソ	ホトケノザ アキノタムラソウ アキギリ キバナアキギリ シロネ ヒメシロネ コシロネ ナギナタコウジュ ヤマハッカ クマツヅラ
アカネ	ヘクソカズラ イナモリソウ ツルアリドウシ アカネ ヤエムグラ ヨツバムグラ キヌタソウ	クマツヅラ		クマツヅラ ムラサキシキブ コムラサキ ヤマリソウ ハナイバナ ホタルカズラ キュウリグサ
オオバコ	オオバコ ヘラオオバコ	ムラサキ		ムラサキ ヤマリソウ ハナイバナ ホタルカズラ キュウリグサ
ハエドクソウ	ハエドクソウ	ヒルガオ		ヒルガオ コヒルガオ ネナシカズラ マメダオシ
キツネノマゴ	キツネノマゴ	ガガイモ		ガガイモ イケマ スズサイコ コカモメズル
タスキモ	ミミカキグサ タスキモ	リンドウ		リンドウ ツルリンドウ コケリンドウ ハルリンドウ フデリンドウ リンドウ センブリ
イワタバコ	イワタバコ	フヂウツギ		フヂウツギ ヒメナエ アイナエ
ハマウツボ	ナンバンギセル	モクセイ		モクセイ イボタノキ コバノトネリコ
ゴマノハグサ	キリ(栽植) ゴマノハグサ ミゾホオズキ シソクサ ムラサキサギゴケ トキワハゼ オオアブノメ アゼトオガラシ ウリクサ アゼナ タチイヌノフグリ オオイヌノフグリ イヌノフグリ ママコナ	エゴノキ		エゴノキ クサレダマ コナスビ スマトラノオ オカトラノオ
ノウゼンカズラ	キササゲ ノウゼンカズラ(栽植)	ヤブコウジ		ヤブコウジ ヤマツツジ
ナス	タコ	ツツジ		ツツジ
シソ	キランソウ ヒメナミキ タツナミソウ カキドオシ ウツボグサ オドリコソウ			

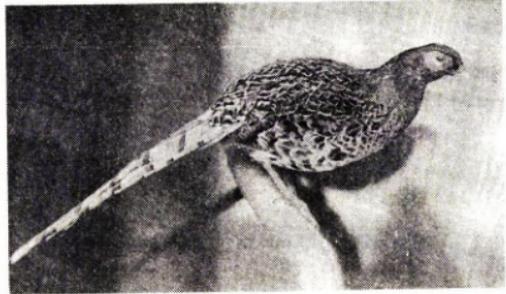
第三章 植 物

ツ	ツ	ジ	レンゲツツジ	オトギリソウ	オトギリソウ
ネ	ジ	キ	ネジキ	ツ	ヤブツバキ
			スノキ	ブ	ノブドウ
			ナツハゼ		ヤマブドウ
イ	チ	ヤクソウ	イチヤクソウ		サンカクヅル
			ギンリョウソウ		ヤブガラシ
リ	ョ	ウブ	リョウブ		ツタ
ミ	ズ	キ	アオキ	クロウメモドキ	クマヤナギ
			ハナイカダ		クロウメモドキ
			ミズキ		クロツバラ
			ヤマボウシ	ツリフネソウ	キツリフネ
セ		リ	ノチドメ		ツリフネソウ
			チドメグサ	ト	トチノキ
			ヤブニンジン	カ	イロハモミジ
			ヤブジラミ	エ	ウリカエデ
			ミンマサイコ	ニ	ツルウメモドキ
			ミツバ	シ	ニシキギ
			セリ		コマユミ
			ドクゼリ		マユミ
			ノダケ		ツリバナ
ウ	コ	ギ	タラノキ	モ	アオハダ
			メダラ	チ	ウメモドキ
			ウド	ノ	ヤマウルシ
			トチバニンジン	キ	スルデ
			キズタ	ウ	ツタウルシ
			ヤマウコギ	ル	トウダイグサ
			ウコギ	シ	タカトウダイ
			コシアブラ		ノウルシ
			タカノツメ		ニシキソウ
			ハリギリ		コニシキソウ
アリ	ノ	トウグサ	アリノトウグサ		エノキグサ
			フサモ	ヒ	ヒメハギ
ア	カ	バナ	アカバナ	メ	シンジュ
			マツヨイグサ	ハ	サンショウ
			オオマツヨイグサ	ギ	イスザンショウ
			ヒシ	ニ	カタバミ
ヒ		シ	ミソハギ	ガ	タチフクロ
ミ	ソ	ハギ	スマレ	キン	ゲンノショウコ
ス	ミ	レ	タチツボスミレ	カ	マンサク
			ミズオトギリ	タ	コアジサイ
オト	ギ	リソウ	コケオトギリ	バ	チダケザシ
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	
				シ	
				タ	
				バ	
				ミ	
				ノ	

第三章 植 物

キ ン ボ ウ ゲ	イチリンソウ キクザキイチリンソウ タガラシ ウマノアシガタ キツネノボタン ケキツネノボタン オトコゼリ アキカラマツ ヤマトリカブト	タ	デ	ツルタデ オオイヌタデ イタドリ ママコノシリヌグイ
ス イ レ ン	コオホネ ヒツジグサ	ビ ャ ク ダ ン	イ ラ ク サ	カナビキソウ イラクサ アオミズ アカソ ヤブマオ
ナ デ シ コ	ツメクサ ノミノツヅリ ミミナグサ ウシハコベ ハコベ ノミノフスマ カワラナデシコ フシグロセンノウ	ク	ワ	クワクサ カナムグラ カラハナソウ
ス ベ リ ヒ ユ	スベリヒユ	ニ	レ	ケヤキ エノキ
ザ ク ロ ソ ウ	ザクロソウ クルマバザクロソウ	ブ	ナ	コナラ クスギ クリ カシワ
ヒ ユ	アオビユ ヒユ イヌビユ	ハ ン ノ キ		イヌシデ アサダ ハンノキ
ア カ ザ	アカザ コアカザ シロザ	ヤ ナ ギ		イヌコリヤナギ ネコヤナギ
タ デ	スイバ ヒメスイバ ギンギシ ミヅヒキ ミチヤナギ イシミカワ ミゾソバ ヤノネダサ アキノウナギツカミ サナエタデ ヤナギタデ ハナタデ	セ ン リ ョ ウ		ヒトリシヅカ フタリシヅカ
		ド ク ダ ミ		ドクダミ
		ラ	ン	サギソウ トキソウ キンラン ギンラン カキラン ネズバナ ミヤマウズラ クモキリソウ ジュンラン サイハイラン
		ア ヤ メ		ヒオウギアヤメ
		ヤ マ ノ イ モ		ヤマノイモ トコロ タチドコロ
		ヒ ガ ン バ ナ		キツネノカミソリ

ユ	リ	ホトトギス ギボウシ ミヅギボウシ ノカンゾウ ヤブカンゾウ ウパユリ コオニユリ ヤマユリ カタクリ アマドコロ ツルボ チゴユリ スズラン ジャノヒゲ ヤブラン シオデ サルトリイバラ ヤマガシユウ	カヤツリグサ	アゼテンツキ アブラガヤ ホタルイ カンガレイ サンカクタイ カヤツリグサ コゴメガヤツリ アゼガヤツリ ミヅガヤツリ タマガヤツリ ヒメクダ アズマネザサ スズメノテツボウ コスカグサ カモジグサ スズメノチャヒキ カモガヤ スズメノカタビラ ヨシ ヌマガヤ カゼクサ ニワホコリ オヒシバ ネズミガヤ シバ チカラシバ エノコログサ キンエノコロ メヒシバ アキメシバ イヌビエ タイスビエ ケイスビエ チゴザサ チガヤ チヂミザサ ススキ コブナグサ オモダカ ウリカワ オモダカ
イ	グ	イ	イ	ネ
ミ	ヅ	ア	オ	イ
ツ	ユ	ク	サ	
ホ	シ	ク	サ	
ウ	キ	ク	サ	
サ	ト	イ	モ	
カ	ヤ	ツ	リ	グ
				サ
				イ
				ネ
				オ
				モ
				ダ
				カ



ヤマドリ (♂)



コサギ

沼も数多く、動物にとっては格好のすみかと考えられる。

一 哺乳類

ニホンザル・ツキノワグマといった大型哺乳類の生息は確認されていない。キツネもほとんど見かけられない。リスはよく道を横切ったりするのを見かけるが、ヤマネは、もっと高地でないと生息しない。イタチはよく人家附近に出没する。ノウサギは開拓によって減少してはいるが、各地で確認される。ノウサギには夏毛と冬毛があり、冬

季には体毛が白化する。原因は気温の低下と光周性（日照時間の差）によるものと考えられている。木の芽・皮などを食するため森林・作物を加害する害獣である。クマネズミ・ドブネズミは、人家に入り込み穀物を食い荒らし、ハタネズミなどは畑の作物を荒らす。キクガンシラコオモリ・イエコオモリは翼手類に属し、人家や洞窟などに住み、夕刻よりよく活動する。モグラは食虫類に属し分布が広い。

二 鳥類

当地域で見られる野鳥一〇二種類を表にまとめて記録する。（第一表）なお、留鳥は一年間を通じ同地域に生息するも

第四章 動物

第1表 矢吹町の鳥類目録

鳥名	科名	渡り区分	鳥名	科名	渡り区分
ハンブトガラス	カラス	留鳥	サンコウチウ	ヒタキ	夏鳥
ハンボソガラス	〃	〃	コサメヒタキ	〃	〃
オナガ	〃	〃	キビタキ	〃	〃
カケス	〃	〃	オオルリ	〃	〃
ムクドリ	ムクドリ	〃	メボソムシクイ	ウグイス	〃
コムクドリ	〃	夏鳥	センダイムシクイ	〃	〃
スズメ	ハタオリドリ	留鳥	ウグイス	〃	漂鳥
ニューナイスズメ	〃	〃	ヤブサメ	〃	夏鳥
シメ	アトリ	冬鳥	セツカ	〃	漂鳥
イカル	〃	留鳥	オオヨシキリ	〃	夏鳥
コカワラヒワ	〃	〃	トラツグミ	ツグミ	漂鳥
マヒワ	〃	冬鳥	アカハラ	〃	〃
ベニマシコ	〃	〃	ツグミ	〃	冬鳥
オオマシコ	〃	〃	クロツグミ	〃	夏鳥
ハギマシコ	〃	〃	ノビタキ	〃	〃
アトリ	〃	〃	ルリビタキ	〃	漂鳥
アオジ	ホオジロ	漂鳥	ジョウビタキ	〃	冬鳥
ホオジロ	〃	〃	コマドリ	〃	夏鳥
ホオアカ	〃	〃	ミソサザイ	ミソサザイ	留鳥
カシラダカ	〃	冬鳥	カワガラス	カワガラス	夏鳥
ヒバリ	ヒバリ	漂鳥	ツバメ	ツバメ	〃
キセキレイ	キセキレイ	〃	イワツバメ	〃	〃
セグロセキレイ	〃	留鳥	ヤマセミ	カワセミ	留鳥
ハクセキレイ	〃	漂鳥	カワセミ	〃	夏鳥
メジロ	メジロ	留鳥	アカショウビン	〃	〃
シジュウカラ	シジュウカラ	〃	ヨタカ	ヨタカ	〃
コガラ	〃	〃	アオゲラ	キツツキ	留鳥
ヤマガラ	〃	〃	アカゲラ	〃	〃
ヒガラ	〃	〃	コゲラ	〃	〃
エナガ	〃	〃	カウコウ	ホトトギス	夏鳥
モズ	モズ	〃	ツツドリ	〃	〃
チゴモズ	〃	夏鳥	ツツドリ	〃	〃
アカモズ	〃	〃	ホトトギス	〃	〃
キレンジャク	キレンジャク	冬鳥	ジュウイチ	〃	〃
ヒレンジャク	〃	〃	アオバズク	フクロウ	〃
ヒヨドリ	ヒヨドリ	留鳥	フクロウ	〃	留鳥
サンショウクイ	サンショウクイ	夏鳥	トビ	ワシタカ	〃
			チュウヒ	〃	冬鳥

ノ	ス	リ	ワ	シ	タ	カ	留鳥	ヒ	ト	リ	ガ	モ	ガ	ン	カ	モ	鳥
ハ	ヤ	サ	ハ	ヤ	ブ	サ	冬鳥	カ	イ	ツ	ブ	リ	カ	イ	ブ	リ	留鳥
チ	ウ	ウ		〃	〃		〃	キ	ジ	バ	ト	ト	ハ	ツ	ト	〃	〃
コ	ゲ	ギ	サ	〃	〃	ギ	〃	タ	シ	ド	ギ	リ	シ	ド	ギ	冬鳥	
ゴ	サ	イ		〃	〃		〃	コ	ル	チ	リ	リ	チ	ド	リ	夏鳥	
サ	イ	イ		〃	〃		〃	イ	カ	リ	リ	リ	チ	〃	リ	留鳥	
ミ	ソ	イ		〃	〃		〃	ケ		イ	リ	ナ	ク	〃	ナ	〃	
ヨ	シ	イ		〃	〃	モ	〃	ク	ヒ	イ	ナ	ナ	ク	〃	ナ	〃	
オ	ハ	ウ	ガ	ン	カ		冬鳥	ヒ	ク	イ	ン	ン	ク	〃	ナ	〃	
オ	ガ	モ		〃	〃		〃	バ	ズ	イ	ラ	ラ	キ	〃	ジ	〃	
マ	ガ	モ		〃	〃		〃	ウ	ユ	ケ	イ	イ		〃		〃	
マ	ガ	モ		〃	〃		〃	コ	ジ	ケ	ジ	ジ		〃		〃	
コ	ガ	モ		〃	〃		〃	キ	マ	ド	ド	リ		〃		〃	
ト	エ	モ		〃	〃		〃	ヤ						〃		〃	
カ	ガ	モ		〃	〃		留鳥							〃		〃	

の、夏鳥は渡り鳥のうち、春日本に渡来繁殖し、秋に温暖な越冬地に帰るもの、冬鳥は、渡り鳥のうち冬を日本ですごし、春北方に帰るもの、漂鳥は夏は涼しい山地ですごし、冬市街地に移動してくるもの、旅鳥は、渡り鳥のうち渡りの途中で日本に一時たち寄りもの、迷鳥は、渡り鳥のうち本来なら日本に渡来しない鳥が迷って立ち寄ったものである。

三 爬 虫 類

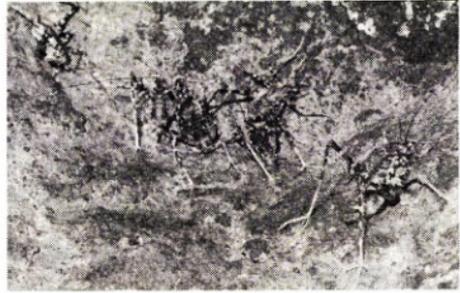
カメ類は野生状態のものはみられない。トカゲ・カナヘビは広く生息し、昆虫などを食べるので農業上有益動物である。尾をつかむと、あと肢の後部より切れる自切現象が見られ、これによって外敵からのがれることができる。これは後に再生する。アオダイショウ・シマヘビ・ヤマカガシの三種も広く日本全土に分布する。特にアオダイショウは日本最大で、大きなものは二メートルにもなる。マムシは日本では本州における唯一の毒蛇で、かまれると命にかかわることがある。夏に子を卵胎生する。山地に好んで生息するが、平地にも見られる。あまり乾燥してはいない森・やぶ・草むらなどにもすみ、水田のあぜなどにも出る。餌はカエルを好むが、ドジョウ・トカゲ・ネズミなども食べる。ジムグリは各地に広く分布する。

四 両棲類

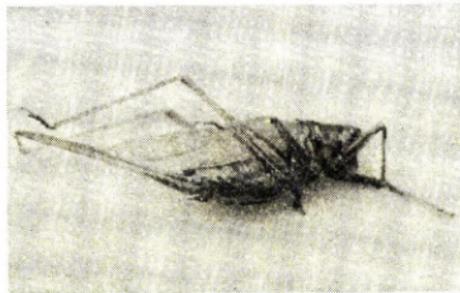
ニホンヒキガエルは日本最大のカエルで、体長一二センチメートルにもなり、分布は広い。トノサマガエルは最も普通のカエルで、池沼・水田等に生息する。三〜四月頃寒天質に包まれた卵を生む。一卵塊にはおよそ一、〇〇〇個の卵がある。ニホンアカガエル・ヤマアカガエルはよく見かける。ニホンアマガエルは平地に広く分布、環境により体色が変化する。ウシガエルは大正七年（一九一八）に移入され、現在では各地で大繁殖、池・沼・溝などの水量の多いところに生息、ウシに似た低い鳴き声をあげにぎやかである。体長は二〇センチメートルに達する大型種、一度に一万〜二万個の卵を生み、オタマジャクシは越冬し、一二センチメートル程の大きさとなる。魚・小形のカエル・ザリガニなどを食べる。イモリは、池・沼・河川などに広く分布する。

五 魚類

ナマズ・ドジョウ・ウナギ・タナゴ・モロッコ・モツゴ・コイ・フナ（キンブナ・ギンブナ・ゲンゴロウブナ）などは池沼・河川に広く生息、ライギョは大正十二年（一九二二）頃朝鮮から渡来したと記録され、現在では北海道を除く全域に広がっている。カムルチーとも呼び、貧欲な肉食性で、小魚・カエル・エビなどを好み共食いもする。水流のゆるい泥底の水草の茂った所を好み生息、体長は一メートル近くにもなる。原産地は中国東北部、朝鮮半島平野部の河川湖沼といわれる。オイカワやハヤの仲間も見られるし、池沼にはカジカの生息が確認されている。魚の仲間ではなく円口類であるが、隈戸川などにはカワヤツメが生息している。



洞窟の中のマダラカマドウマ



キリギリス

六 節足動物昆虫類

現在地球上には約一〇〇万種の動物が生息するといわれるが、このうちの四分の三の七五万種は昆虫とされている。このうち当地域に見ることのできる主なものを記録する。

(一) 直翅目(バッタ・コオロギの仲間)

トノサマバッタ・オンブバッタ・クルマバッタモド
キ・ショウリヨウバッタ・ヒシバッタ・セスジツユムシ・クサキリ・ウマオイムシ・キリギリス・カマドウマ・マダラカマドウマ・エンマコオロギ・スズムシ・ケラ・オオカマキリ・カマキリ・ヤマトゴキブリ・チャバネゴキブリ・コバネイナゴ・コバネササキリ。

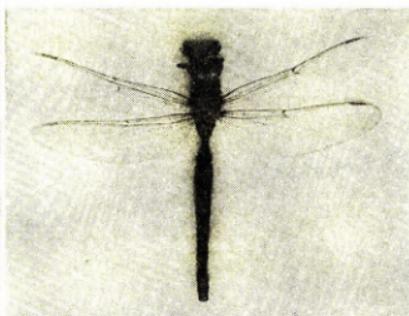
(二) 蜻蛉目(トンボの仲間)

矢吹には池沼、湿地河川が多いので、トンボの仲間は比較的豊富である。

ハグロトンボ・アオハダトンボ・アオイトトンボ・キイトトンボ・モノサシトンボ・オツネントンボ・オニヤンマ・カトリヤンマ・サナエトンボ・ギンヤンマ・シオカラトンボ・シオヤトンボ・オオシオカラトンボ・ノシメトンボ・ナツアカ



ノシメトンボ



カトリヤンマ

ネ・アキアカネ・マユタテアカネ。

(三) 脈翅目 (ウスバカゲロウの仲間)

ウスバカゲロウ・クサカゲロウ・ツノトンボ

(四) 膜翅目 (ハチ、アリの仲間)

スズメバチ・クロスズメバチ・キアシナガバチ・クマバチ・クロマルハナバチ・ミツバチ・クロヤマアリ・アカヤマアリ。

(五) 双翅目 (ハエ、アブの仲間)

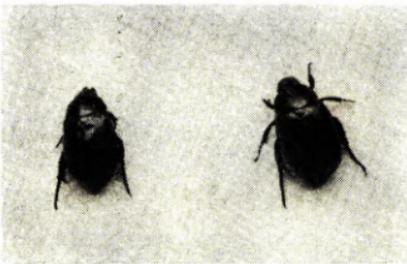
ヒメクロバエ・イエバエ・クロイエバエ・ヒメイェバエ・サシバエ・ウシバエ・キンバエ・オオクロバエ・ヒロズキンバエ・オオシヨウジヨウバエ・アカアブ・ウシアブ・アカウシアブ・シオヤアブ・オオイシアブ・ハナアブ・オオクロヤブカ・アカイエカ

(六) 鞘翅目 (昆虫の仲間では最も種類が多い甲虫の仲間)



オニヤンマ

クワガタムシ科 ミヤマクワガタ・ノコギリクワガタ・コクワガタ
カミキリムシ科 シロスジカミキリ・ゴマ



(上段)

右 ゴマダラカミキリ
 中 カブトムシ
 左 タイコウチ
 (左、水田・池沼にすむ)

(下段)

右 ガムシ
 (水田・池にすむ)
 左 コガネムシ

ダラカミキリ・キボシカミキリ・クワカミキリ・ミヤマ
 カミキリ・トラカミキリ・タケトラカミキリ・アカハナ
 カミキリ・リンゴカミキリ・スギカミキリ・ホタルカミ
 キリ・ヤハズカミキリ

ゾウムシ科

コクゾウムシ・アズキゾウムシ・オ
 オゾウムシ・シロコブゾウムシ・イネゾウムシ・オオア
 オゾウムシ

オトシブミ科

オトシブミ・ゴマダラオトシブミ・
 アシナガオトシブミ・モモチヨツキリ

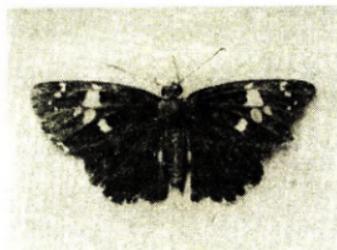
ハムシ科

ルリハムシ・ウリハムシ・フジハム
 シ・クワハムシ・クロウリハムシ・ヨモギハムシ・ヤナ
 ギハムシ・イタドリハムシ・キベリトゲトゲ・カタビロ
 トゲトゲ・ダイコンサルハムシ・カメノコハムシ・アオ
 カメノコハムシ・ジンガサハムシ。

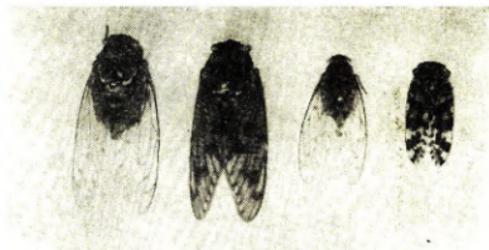
植物の葉を食べる仲間で、大きさは一ミリから一〇ミ
 リ程度といろいろである。

その他の甲虫類

カブトムシ・オオゴミムシ・セアカ
 ゴミムシ・キベリマルクビゴミムシ
 (畑に住む)・ハンミョウ(道案内ともいう)・ホタル・
 エンマムシ・ゲンゴロウ・ミズスマシ・ガムシ(水田、



ダイミョウセセリ



左からエゾゼミ・アブラゼミ・ツクツクボウシ・ニイニゼミ

池に住む)・テントウムシ・ナナホシテントウ・ニジュウヤホシテントウ・オオニジウヤホシテントウ・コメツキムシ・カナブン・シラホシハナムグリ・アオカナブン・クロナブン・コガネムシ・ヒメコガネ・ピロウドコガネ・アカピロウドコガネ・マメコガネ・コアオハナムグリ・センチコガネ

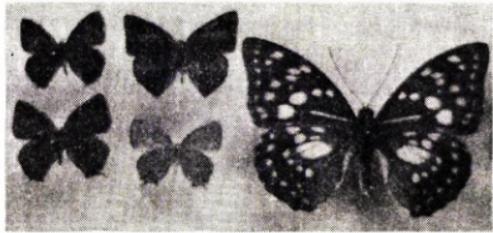
(七) 半翅目 (カメムシ・セミの仲間)

ミンミンゼミ・エゾゼミ・アブラゼミ・ツクツクボウシ・ヒグラシ・ニイニゼミ・シロオビアワフキ・ツマグロヨコバイ・イナズマヨコバイ・アオクサカメムシ・チャバネアオカメムシ・クサギカメムシ・ヘリカメムシ・アメンボ

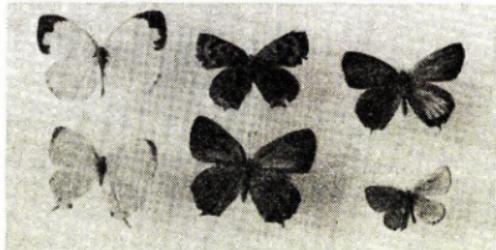
(八) 鱗翅目 (チョウ・ガの仲間)

鱗翅目のうち、特にチョウの仲間はいへん美しく各地に広く分布し、また、人目につき易いことでよく採集され研究が進められている。日本では二百余种、福島県内ではそのうち約一〇二種類が知られている。蛾の類はチョウに比べて種類がきわめて多いが研究ふじゅうぶんであるためアメリカシロヒトリのみにとどめた。チョウとガの簡単な区別の目安としては次のようになる。(1)触角の形はチョウでは棍棒状かばち状、先端部近くにふくらんだ部分があるが、ガでは糸状または櫛齒状である。(2)とまるとき、チョウは翅を立てるが、ガは水平に開く。(3)チョウは昼、蛾は夜活動する。(1)はほとんど例外はないが、(2)、(3)には例外がある。

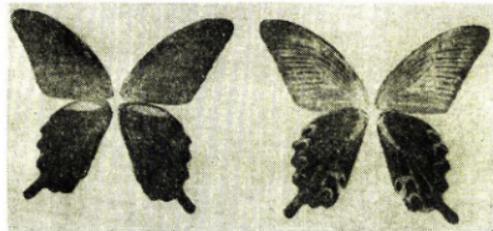
セセリチョウ科 オオチャバネセセリ・コチャバネセセリ・イチモンジセセリ (稲の



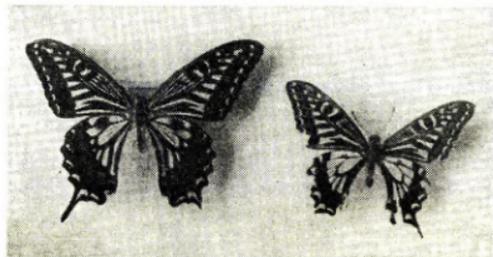
上左より クロミドリシジミ(♂)・ウラギンシジミ
下左より クロミドリシジミ(♀)・ミヤマカラス
シジミ・右 オオムラサキ



上左より キチヨウ・ベニシジミ・ミドリシジミ(♂)
下左より ウラナミアカシジミ・ミドリシジミ(♀)
ルリシジミ



カラスアゲハ (左は表面、右は裏面)



アゲハ (左は夏型、右は春型)

害虫)・ダイミョウセセリ・ミヤマセセリ・アオバセセリ(各地に普通)・キマダラセセリ

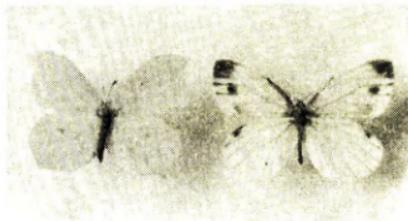
シジミチヨウ科 クロミドリシジミ(きわめてまれ)・ウラギンシジミ(まれ)・ミヤマカラスシジミ(少ない)・ツバ
メシジミ・ルリシジミ・ヤマトシジミ・トラフシジミ・ミドリシジミ・ベニシジミは各地に普通。ウラナミアカシジミ・
ヤマカラスシジミは少ない。

シロチヨウ科 モンシロチヨウ・スジクロシロチヨウは普通、ツマキチヨウ(少ない)。ヤマキチヨウ(少ない)・ツ
マグロチヨウ(暖地性で少ない)・キチヨウ・モンキチヨウは各地に普通。

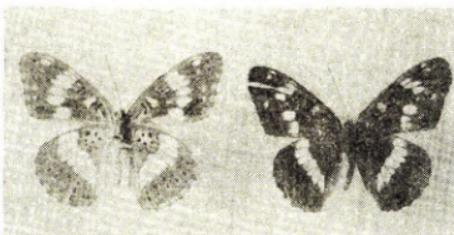
アゲハチヨウ科 アゲハ・キアゲハは普通、オナガアゲハは少ない。クロアゲハ・カラスアゲハは普通、まれにアオス
ジアゲハを見ることがある。これは暖地性で、風その他の影響で流されて来るものと思われる。



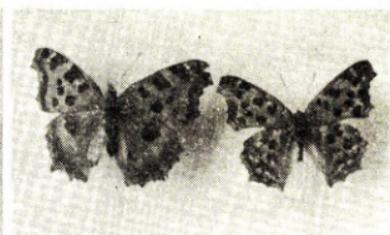
メスドロヒョウモン(左)、アカタテハ(右)



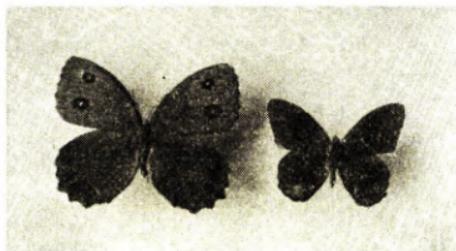
ヤマキチョウ(左)、モンシロチョウ(右)



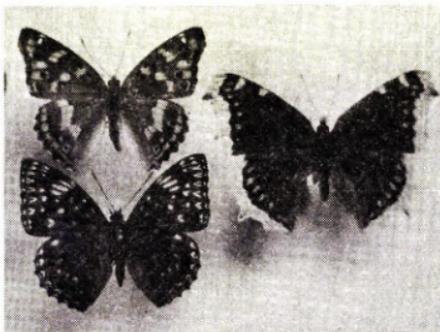
イチモンジチョウ (右は表面、左は裏面)



ヒオドシチョウ(左)、キタテハ(右)

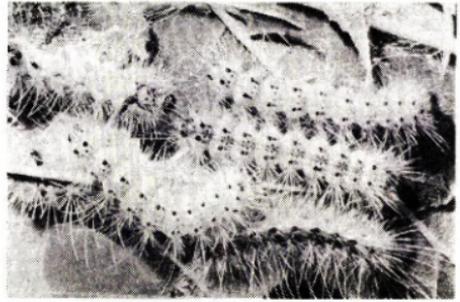


ジャノメチョウ(左)、ヒメジャノメ(右)



コムラサキ(右)、キベリタテハ(左上)、
スミナガシ(左下)

タテハチョウ科 クモガタヒョウモン・ミドリヒョウモン・メスドロヒョウモン・ウラギンヒョウモンは普通に分布する。イチモンジチョウ・コムスジはよく見られる。オオミスジは少ない。ミスジチョウは数少なくまれ。クジャクナヨウは少ない。アカタテハ・ルリタテハ・ヒオドシチョウ・キタテハ・シタテハは普通に見られる。キベリタテハは山地性でまれ、スミナガシも山地性で少ない。ゴマダラチョウは普通、コムラサキは数が少ない。雄の翅の表は見る方向により紫色に光る幻色を現わすが、雌では光らない。幼虫の食草はヤナギ類である。



アメリカシロヒトリの幼虫

オオムラサキは日本産タテハチョウ科中の最大形種で、雄の開長一〇〇ミリメートルを越えるものがある。雄の翅表は外縁部を除いて濃紫色に輝くが、雌にはこの紫色部がない。年一回六月下旬から七月に発生。幼虫の食草はニレ科植物のエノキ類、幼虫は落葉下で冬を越す。世界に誇る日本の代表的チョウで、国蝶として知られ、切手の図案にもなっている。

ジャノメチョウ科 翅にはほとんど例外なく蛇の目状の眼状紋がある。ジャノメチョウ・ヒメウラナミジャノメ・ヒメジャノメ・コジャノメ・ヒカゲチョウ・クロジャノメ・キマダラヒカゲなど普通にみられる。

七 アメリカシロヒトリ

アメリカシロヒトリは日本全国に分布するシロヒトリと同じヒトリガ科の一種、日本には昭和二十一年頃侵入土着、街路樹の大害虫となった。原産地は北アメリカ、山林などには侵入しない。成虫は年二回、五、六月と八、九月に発生する。卵は五〇〇〜一、〇〇〇個位の塊として葉裏に産みつけられ、母蛾尾端の白毛でおおわれている。孵化した幼虫は五齢までは葉一面に糸を張って巣を造り群生する。六齢以降は分散生活をする。第一化期の幼虫は六、七月に、第二化期は八、九月にみられ、蛹で越冬、幼虫はきわめて多食性で、サクラ・プラタナス・クワ・ヤナギ・カキなど一〇〇種以上の植物を加害する。

八 アメリカザリガニ

アメリカザリガニは、節足動物甲殻類ザリガニ科の一種で、昭和五年（一九三〇）に食用ガエルの餌としてアメリカから輸入されたものが広がり、単にザリガニあるいはエビガニと呼ばれている。日本固有のザリガニは東北・北海道産で、体長は五、六センチメートル程度であるが、アメリカザリガニは一〇センチメートル以上になり、老成すると赤味を帯び美しい。池沼・水辺・水田のあぜなどに穴を掘って住み、好んでヒルやイモリを捕食するが、貪欲な雑食性でイネをも食害する。駆除には石灰窒素などが有効、肉は美味である。

（佐藤 隆）

